NEWS きのくに

GREEN COMMUNITY COLLEGE

Vol.17【1】
2013〈春号〉

きのくに活性化センター
発行責任者／中田肇　発行日／2013年4月30日
〒646-0011 和歌山県田辺市新庄町3353-9
和歌山県立情報交流センター ビッグ・ユー内
TEL&FAX0739-26-9670
http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/

南海トラフ地震に高まる危機意識。
―巨大災害と紀南地域の地域力―

きのくに活性化センター会長
中田　肇

八上王子の森と桜

「年々歳々花相似」の言葉どおり、桜はことしも美しい花を咲かせました。しかし、いつになく早い満開の訪れに、日本の繊細で色鮮やかな四季の移ろいが地球温暖化の影響で年々変わりつつあり、天変地異の前ぶれではないか、と気に懸かります。

さて、３月11日で東日本大震災から２年が経ちました。紀南地域では、東日本大震災、紀伊半島豪雨大水害があった2011年以降、巨大災害にたいする不安が広がっています。きのくに活性化センターが和歌山大学経済学部の学生と串本町で行なった住民意識調査では、住民が南海・東南海地震などへの危機感を一段と募らせていることが、わかりました。

国の有識者会議が公表した、南海トラフでの東海・東南海・南海の３連動地震による相次ぐ被害予測は、津波による甚大な被害が予想される、私たち紀南に暮らす住民には衝撃的な内容になっています。

最初の公表は昨年８月でした。想定では最悪の場合全国で死者が32万3千人、全壊・焼失建物238万6千棟、和歌山県の死者は紀南地域を中心に約８万人と予想されています。そして、ことし３月の発表では、マグニチュード9.1の地震が起きると想定し、被害地域は40都府県におよび、経済被害は最大220兆3千億円と試算しています。これは東日本大震災の10倍超、国内総生産の42%の規模となります。

和歌山県では沿岸部の15の市と町で津波の高さが10メートルを超え、被災直後の避難者は県人口の半分近い約45万人と予測されています。経済的被害は９兆９千億円で、阪神淡路大震災の被害額に匹敵します。製造現場や従業員の被災で生産力は低下し、観光や商業活動への重大な影響が見込まれています。あらゆるシュミレーションにもとづく「想定外のない被害予想」といわれる予測ですが、深刻で驚くべき数字です。

県では、独自に被害想定を行なう検討委員会を発足させたほか、紀南地域の各市町村でも被害を少しでも減らす減災に向けた取り組みが地域、学校などの各レベルで始まっています。また、国も「強靱化」政策として防災・減災につながる社会基盤の強化を掲げています。しかしながら、災害に強い防災は、まず一人ひとりの災害への備えと地域力を高めることから始まります。千年に一度のいつ来るかわからない巨大災害にどのように向き合うのか。産官学民―あらゆる組織、個人の参画と知恵の結集による、災害に強いコミュニティの再構築に向けた地域づくりが、いま一層重要になっています。

CONTENTS

・南海トラフ地震に高まる危機意識　中田肇 …… 1 面
・きのくに活性化センター　2012年度活動報告 …… 2 面
・廃校舎の利活用と地域再生へ　西川一弘 …… 3 面
・地域をつくる女性たち④　原さだ …… 4 面
・地域をつくる女性たち⑤　大和田遥 …… 5 面
・串本町住民意識調査から見えてきたこと　馬場俊平 …… 6 面

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.17【2】
2013〈春号〉

きのくに活性化センター 2012年度活動報告

受託事業

●『奥熊野・北山村の民俗誌 100の話で語る村の今昔』の刊行

北山村からの受託事業。『民俗誌』は「祈」から「歌」までの14章で構成、1980年代から2000年までの約20年間に行なった聞き取り調査をふまえて執筆した。執筆者は地元や原水音さんを含む４人、挿絵は田辺市在住の画家廣本直子さん(Vol.16紹介)、装丁はパリ在住のグラフィックデザイナー太田博久氏が担当。『民俗誌』は298頁、2,000部印刷。

『100の話で語る村の今昔』刊行記念講演
絵と言葉による二人のトークショー

村の暮らしを聞く（北山村竹原で）

奥熊野・北山村の民俗誌
『100の話で語る村の今昔』

協力事業

●北山村の婚礼と祝膳料理

NPO北山じゃばら村が、かつて村の結婚式でふるまわれた「祝い料理」を再現し、2013年１月に披露した。きのくに活性化センターでは、村の新たな観光資源の発掘をめざすNPOの事業に協力、和歌山大学経済学部の女子学生５人が村内に住む約20人の女性(主に大正、昭和ひとケタ生まれ)に結婚式の様子や料理の聞き取り調査を行ない、報告書にまとめた。料理は地域づくりの料理人・大和田遥さんが担当した(本号p.5で紹介)。

独自事業

●「廃校舎の利活用と地域再生」研究会設立

過疎化と少子高齢化、市町村合併等によって増えつづけている廃校舎を、地域づくりの拠点のひとつとして再生することを目的に、きのくに活性化センターでは研究会の設置をめざしている。その準備会(座長　生涯学習センター講師西川一弘氏)を発足。

研究会は、きのくに活性化センター企画運営委員会委員を中心に廃校舎の再生に取り組み人材や関心を寄せる住民らで構成する。2013年度に現地調査を実施し、事例を集めて廃校舎活用のブックレットを作成へ。

▲「廃校舎の利活用と地域再生」研究会

●串本町における南海・東南海地震に関する住民意識調査

南海・東南海から南海トラフ地震まで巨大災害が近い将来、高い確率での発生が予測されるなかで、串本町における住民意識調査を実施し、報告書にまとめた。2004年から和歌山大学経済学部生が行なってきた調査の３回目で、きのくに活性化センターで活動を支援した。

調査報告Vol.3　串本町における南海・東南海地震に関する住民意識調査

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.17【3】
2013〈春号〉

廃校舎の利活用と地域再生へ

利活用の事例集をブックレットに

きのくに活性化センター企画運営委員
「廃校舎の利活用と地域再生」事業座長 西川 一弘

きのくに活性化センターでは「廃校舎の利活用と地域再生事業」に取り組む。事業自体は25年度からスタートするが、その推進母体となる研究会の準備会会合を平成25年１月25日に実施した。

センターでは以前に和歌山大学経済学部と協動して、廃校舎の現状を調査した。本事業はこれらの貴重な調査資料がベースとなっているが、センターのミッションと照らし合わせた場合、単に研究会合やフォーラムを開き、廃校舎利活用のあり方を論ずるだけでは意味をなさないと考える。それゆえ、準備会合では「きのくにらしい」成果を求めるべく、議論を行った。

議論の中では「校舎改修、維持管理の予算がかかり、利活用が進んでいない」「実際に活用している人やその地域の思いを聞くことが大切」「活用したいけど障害となっている事柄をしっかり分析し、その突破策を活用事例から導く」「今後活用したい人が一歩でも踏み出せるような発信が必要」「廃校舎問題は中山間地域の問題のように感じるが、市街地にも統廃合によって廃校舎が出てきている。そのことを認識する必要がある」などの意見が出された。

議論を踏まえ、本事業を推進するにあたっては、①実際に活用しているところにインタビューを実施して、共通的な悩みや課題解決の方策を一緒に考える、②センターの資源を活用しながら実際に活用の取り組みにセンターとして参画し、課題に対しては共に悩みながら解決を目指す、ことを方法としたい。そして最終的には、インタビューや実践参画で得られた知見をブックレットなどで取りまとめて発信したいと考えている。

前号の鈴木裕範事務局長のレポートにもあるように、南紀熊野地域にはさまざまな廃校舎の利活用事例が存在する。しかしながら、そのうちの４割は何も活用されていない。その中の多くは「活用したいがその一歩が踏み出しにくい」という思いではなかろうか。本事業において、実際の廃校舎の利活用に参画を検討している新宮市熊野川町の旧九重小学校は、一昨年の紀伊半島大水害によって取り壊しが決定し予算化されていたものが中止され、利活用が行われる希有な事例である。利活用を進めるＮＰＯ法人山の学校と地元の九重地域の実践に参画させていただきながら、今後和歌山県において増加が見込まれる廃校舎の新しい価値、そして校舎を基軸とした「地域の息吹」を発信していきたいと考えている。

旧平瀬小学校（田辺市）

旧皆地小学校（田辺市）

旧九重小学校（新宮市）

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.17【4】
2013〈春号〉

地域をつくる女性たち④　起きない地域が起き出した

ふるさと龍神で取り組んだ12年

季楽里龍神専務理事　原さだ

私の住む、龍神村は近畿最大の面積を誇る田辺市の北部、和歌山県の中央東部に位置しています。村域の70％が標高500m以上の山地で占められ(市面積の25％)ています。日本三美人湯のひとつである龍神温泉、県最高峰の龍神岳や護摩壇山、日高川などの渓流釣り場など自然資源に恵まれた地域です。

生まれた時から当たり前に享受してきたこの豊かな自然が、どれだけ素晴らしいことなのかも知らず、龍神が大嫌いで都会に出て戻るつもりもありませんでした。そんな私が龍神に戻り、全然起きない地域おこしをはじめ、いつしか12年目を迎えました。４月からは公共の宿「季楽里龍神」の専務理事として常勤することになり、一番驚いているのは自分かもしれません。

平成13年、Ｉターンの草木染め作家の女性と２人で、龍神を訪れて下さるお客様に喜んでいただくにはどうしたらいいのかと、考えはじめ、翌14年２月１日村内に住むＩターン・Ｕターン女性６人で「龍神は～と」を発足しました。「龍神の本物だけを･･･」をコンセプトに、まず産物市を連休や週末に始めました。村内外で行われるイベントで茶がゆをふるまったりというボランティアや首都圏や京阪神での催事に出店することにより龍神のＰＲに努めてきました。

現在は、拠点施設龍神は～との店と田辺市からの指定管理で道の駅「田辺市龍神ごまさんスカイタワー」の２店の運営と新商品の開発販売、企業の森などのお弁当づくり、各種イベントへの出展などを行なっており、女性ばかりだった仲間も、常勤の男性も加わり30人を超えました。

子どもたちが誇れる地域、女性が起業しやすい地域にしたいと始めた地域おこしで、結果を残さなければと焦る気持ちと、理解されずに苦しんだ時期が続きました。しかし、活動を続けるうちに全国に仲間が出来たこと、また、活動をしていなければめぐり会うことの出来なかった、各分野で活躍されている方々との出会いはうれしく刺激的なことでした。

現在は、日本三美人湯のひとつである龍神温泉での「龍神温泉美人プログラムづくり」の一環としてすすめていた「龍神温泉美人体操」がＮＨＫ和歌山放送局の防災体操にとりあげられたり、龍神特産の里芋(ほいも)のブランド化による「里芋焼酎」も４年目を迎え、皆さまのご協力で毎年完売させていただくなど、いろいろな団体と龍神を盛り上げています。龍神村国際芸術村構想も今年で30周年を迎え世界トップクラスの芸術家の方をはじめ、多くの芸術家が在住して下さり活気づいています。

お客様から「筋金入りのスローフード」と称される、龍神の伝統保存食「柚べし」を守り伝えることはもとより、龍神らしいオリジナル商品の開発にメンバーたちと試行錯誤を続けていたところ、今春、第一回「ひめこらぼ大賞」をいただき一層の励みになりました。

龍神温泉に癒しを求めて訪れて下さるお客様に心も身体も元気に、そして美しくなっていただける仕組みづくりを目指し、まず、自分たちが健康で笑ってお客様をお迎え出来るように努力してまいりたいと思います。

龍神温泉美人体操（ごま山スカイタワー前で）

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.17【5】
2013〈春号〉

地域をつくる女性たち⑤

山村の食文化〈北山村の昭和の祝い膳を復元〉
お母さんたちのもてなし力、気くばり力を学ぶ。

株式会社えんかい　代表取締役社長　大和田遥

和歌山県北山村、周囲を奈良県と三重県に囲まれている飛び地の村。初めて聞いた時、さぞかし独特な文化が根づく個性的な村なのか？喧嘩別れでもした村なのか？興味がわきました。

私は高校を卒業してから、関東で飲食業に就き、料理や飲食サービスの経験を積み、今は地域づくり・ブランドづくりの会社を営んでいます。飲食業でのスキルを生かした仕事がしたいと思っていたところ、北山村で昭和20～30年代に結婚式の披露宴で振る舞われていた「祝い膳」の復活イベントで料理をプロデュースする仕事が舞い込んできました。

皆さんは料理や普段の食事についてどんな考えをお持ちでしょうか？

私にとってとは、提供する側としての仕事であったと同時に、職業や年齢、身分に関係なく共に分かち合える喜びであると思っています。食物・食材は人と自然界の接点であり、生命力のある食べ物を頂くことで、活き活きとした生きる力をいただきます。地球と人の循環と調和であるとも思います。

私が地域の食に関心を持ったのは、土地の風土に合った作物や暮らし方の工夫が地域の食をつくり、地域固有の文化を形成し、その食文化がその地の人々を支える大切なモノだと感じたからです。日本の風土や食文化の素晴らしさを、地域で伝承しているお母さんの味、郷土の味を実践的に学びたいと思うようになりました。

「祝い膳」の再現にあたっては、村のお年寄りからお話を聞かせていただき、それに基づいてお母さんたちと一緒にお料理をつくっていきました。サンマ寿司や昆布で巻いた寿司などの寿司料理を基調とし、小鯛の塩焼きやコンニャクの白あえ、煮物、酢の物など８品からなるご馳走です。

でも実際「祝い膳」を作る場面では、山村に住み続けてきた女性たちの仕事は、東京で料理人をしてきた私には受け入れがたい点がいくつもありました。季節、産地問わず何でも手に入り、効率化や価格競争から生まれる食に溢れた都会と、山村ならではの食材を使うよりは村ではなかなか手に入らない海の食材を基調としたお祝いの献立の構成。保存目的に多用される白砂糖や「甘く量の多い事がおもてなし。だから沢山つくらなアカン」という考え方と、「美味しいものは少しずつが心にも体にもよい。」と教えられてきた私には、この価値観の違いの折り合いをどこで付けるのか、終始必死でした。

もちろん沢山のことを教えてもらいました。年長者の言う事、する事を伝承していく心。食器の不足や作る人の不足を助け合う近隣のつながり。女性ならではの細やかで表立たない気遣いや、先々を見越した段取り等々。そして、何よりおもてなしに「これくらいで、まぁいいでしょ。」は絶対にありません。すべてに全力投球する姿勢。

この「祝い膳」を復活させるという仕事では、改めて地域の文化とお母さんたちの人間力に感心し、地域に「食」で関わっていける事に喜びを感じました。私たちはめまぐるしい時代を生きていますが、北山村の文化やお母さんたちから教えてもらったことを常に言い聞かせていきたいと思います。

蘇った昭和の祝い膳

さんま寿司、昆布寿司の詰め合わせ

NEWS GREEN COMMUNITY COLLEGE
きのくに
Vol.17【6】
2013〈春号〉

「南海・東南海地震　心の備えはいま」串本町住民意識調査から見えてきたこと

和歌山大学経済学部 第61期生　**馬場俊平**

わたしたち和歌山大学経済学部学生(鈴木ゼミナール所属)は、平成24年８月から東牟婁郡串本町内で「南海・東南海地震」に関して、住民意識調査を行なった。目的は、地震や津波という巨大な自然災害に対して、海に直接面した地域の人びとが自然災害とどのように向き合い生活しているのかを探ることにあった。

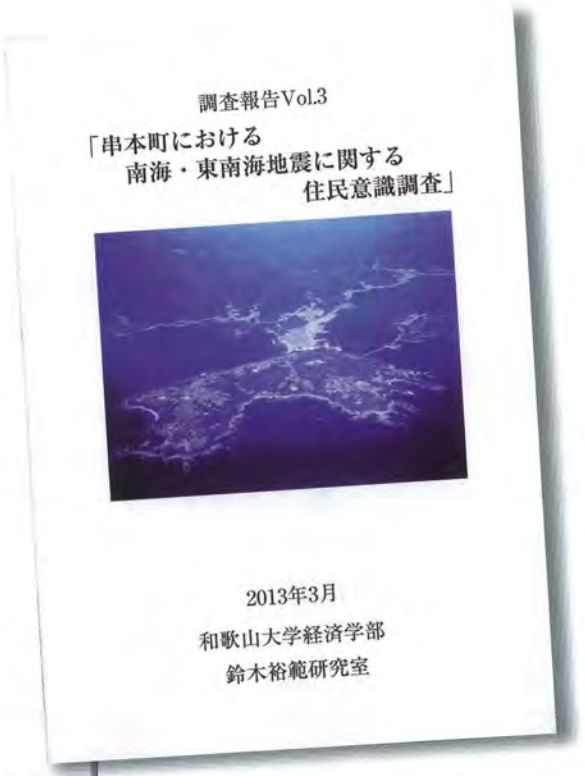
串本町における住民意識調査は、過去に2004年、2008年に行なっており、これが３回目の調査となった。調査方法は、「矢の熊」「大島」「大水崎」「姫」の４地区を対象に、各区長の協力を得て1,000世帯にアンケート用紙を配布して、22の質問に答えてもらう形式で実施し、その結果、38%から回答を得た。

わたしたちが、集計するなかで興味をもったのは、「意識」と「行動」の間の乖離である。質問の「2011年３月11日に発生した東日本大震災は、未曽有の犠牲者と被害をもたらしました。この震災以降、あなたの地震・津波にたいする意識は変わりましたか？」という問いにたいして、「大いに変わった」「変わった」と回答した人が、「自治会や町内会が主催する防災訓練や後援会に、2011年３月11日以後に参加しましたか」という質問で、40%以上が「参加していない」と答えている。地震・津波にたいして不安・恐怖を感じている人は、きわめて多く、災害にたいする意識自体は変わったと自分自身で思っている人が少なくないことは分かった。しかし、災害に関して不安・恐怖を感じているにもかかわらず、行動までには至ってないという人が多いという状況が、あらわになった。

わたしたちは、今回の調査について以下のように考えている。

住民は自分たちが災害にあうというイメージがじつはなかなか出来ないということが最大の理由ではないだろうか。東日本大震災は遠く離れた土地で起きた出来事として捉えられている可能性がまだまだある。時が経つにつれて、意識さえも低くなってしまうかもしれない。さらに、高齢者の中には『この土地で死ねるなら本望。ある意味では、逃げることに関して諦めている』と答えた住民の方がいたことも理由の１つ」にあげられる。意識と行動のギャップ。このことはわたしたち若者もふくめて、「それはいいよね」といいながら、それが直接何かに結びつくかどうかは別問題、という意識と行動の関係を考えさせるものでもあったが―。

今回の調査は串本町という常に災害にたいして隣り合わせの地域で行なった。いわば、災害にたいして意識の高い場所である。阪神・淡路大震災や東日本大震災を単なる災害として風化させないためにも、こういった災害意識の高い地域から、災害対策について今後も考えていく必要がある。



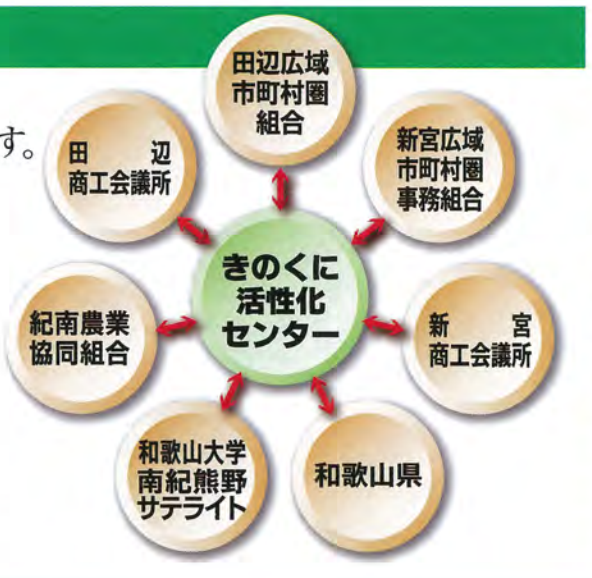
調査報告Vol.3
『串本町における南海・東南海地震に関する住民意識調査』

古座川の河口

きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、
以下の団体・機関で構成されています。
(2013年４月30日現在)

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学・南紀熊野サテライト



編集後記

「想定外の時代をどう生きるか」、南海・東南海地震と串本町の住民意識調査の第一回にこう書いたのは、2006年３月でした。「想定外」と対峙するには、「洞察と備え、そして謙虚さが欠かせない」。そして、災害に見舞われたあとの時間は、どのようであるべきなのか、と。

あれから７年の歳月が流れ、一度ならず未曽有の惨事に直面してきました。わたしたちは本当に学んできたのでしょうか。わたしたちはいまどこにいるのか、と問わねばなりません。個人も、責任を果せない企業とは？そして、国家とは何か、と。　(ひ)